性的同意ハンドブック作成チーム
猪又友理子、春藤優、鳥居里菜、Lilia Chesky

《報告》

What's Consent? —より良い関係性を築く方法—
作成の経緯とその活用実践の報告

What's Consent? How to maintain safe and healthy relationships:
A report on why the handbook was created and how it is being used

1．What's Consent?（性的同意ハンドブック）作成の経緯（執筆：春藤優）

「What's Consent? —より良い人間関係を築く方法—」とは、2021年初夏に作成活動を開始し、2022年３月に完成した性的同意を早大生に広く浸透させるための小冊子であり、「性的同意ハンドブック」と呼ばれるものである。製作主体は、学生グループであり、シャベル～早稲田で性暴力の根を切る～とVoice Up Japan Wasedaという二つのサークルが中心となりつつ、どちらの団体にも属していない有志学生数名が加わったメンバーで作成した。作成にあたっては、メンバー間で話し合いを重ねるだけでなく、サンプルを学内でゲリラ的に配布し通りすがりの学生からフィードバックを受けるなど、幅広い学生の声を反映させ、ブラッシュアップした。また、教職員や学外の専門家の方からもアドバイスをいただき、完成に至った。

作成の契機は二つある。一つは、これまでシャベルなど個々のサークルが性的同意について活動する際には、学外の団体の資料を使用していた。早稲田大学のローカルな事情に適合するような、また既存の資料の不十分さを改善するような冊子が必要だと感じていた。もちろんそもそもこのような活動を行ってきた前提には、大学生活が安全なものとは感じられず、何らかの活動を起こす

必要があると感じたサークルメンバーそれぞれの経験がある。

二つ目は、大学側に制度の変容を促すための交渉の素材としたいと考えていた。大学が性暴力の現場となり、学生が安全に過ごせないと感じているのは、学生の「啓発不足」ではなく大学の制度がそうした暴力を許容し、また深刻なものと受け止めてこなかったことにあると考えた。そうした大きな制度の改革を求める第一歩として、大学が当ハンドブックを主体的に配布し活用するための交渉を行う中で学生の実情を伝え、既存の制度の一部に性暴力防止を組み込むという戦略を立てた。

大学側との交渉にあたっては、ジェンダー研究所所属の先生方を始めとする諸先生方のお力を借りた。2021年９月ごろからは、学生・教員・職員で対話を重ねた。大学公認のものとはならなかったが、2022年４月以降に複数の学部で取り上げていただけたのは、幅広い学生の繋がりと熱い思い、教員との協力、職員との連携の賜物である。

２．作成にあたっての思い（執筆：猪又友理子）

性的同意ハンドブックを作りたいと集まったメンバーは、みな熱い想いを共有していたものの、当然のことながら性的同意ハンドブックを作成するのは初めてであり、何もかも手探り状態でのスタートであった。2021年６月に性的同意ハンドブック作成チームが結成したあと、2021年10月に第１稿が完成した。しかし、第１稿はメンバーの熱い思いが裏目に出て、内容がかなり詰め込まれ、文章量も非常に多く、手軽に誰もが読めるようなものではなかった。そこで、初めて性的同意を知る人でも理解できるようにするために、イラストを中心とし、言葉は必要最低限かつ性的同意についてのみにするようにと方向性を変更した。その結果、2022年１月に完成した第２稿はイラストやグラフが増え、視覚的に内容をつかめるものとなり、一気にわかりやすくなった。その後、コンテンツの配列や文章の軽微な修正、句読点や文字の大きさといった体裁の整理

をし、最終稿が完成した。

性的同意ハンドブックが完成し、１つの山を越えたという想いがあるが、性的同意ハンドブックは誰かに手に取ってもらって、読んでもらって、知ってもらって初めて価値があるものである。全早大生が性的同意について知っている状態になるまで、誰もが被害者にも加害者にもならない早稲田大学になるまで、性的同意ハンドブックをつかって、多くの人に性的同意ってなんだろうと考えてもらう機会を作りたいと考えている。

３．ワークショップ型模擬授業の実施報告（執筆：鳥居里菜）

ハンドブックを用いたワークショップは、必修基礎演習や講義、ゼミなどの全26クラスで実施した。その多くは文学部・文化構想学部で実施されている必修基礎演習やジェンダーに関連する講義であった。ワークショップではハンドブックの内容を説明するにとどまらず、米国で誕生した、ピザの注文をグループで決めるワークや、説明を聞いて考えたことを話し合う時間をつくり、学生に考えてもらうことを主軸とした構成にした。また、学生の知識にあわせてワークショップの内容を初級、中級、上級の三つに分ける工夫もした。その結果、授業後のフィードバック全584回答のうち、性的同意についてワークショップ前は28％のみが理解していたが、ワークショップ後は99％が「理解できた」と回答する成果を得た。５Ｄ（第三者介入）についてはワークショップ前は７％のみが理解していたが、ワークショップ後は93％が「理解できた」と回答している。

ワークショップの実施に際して、①知識にあわせてワークショップの内容を調整すること、②ディスカッションのファシリテーションの二点に苦労した。①では、事前課題であるハンドブックの読み込み度合いがクラス毎に異なっており、学生の知識やディスカッションの発展度合いに差が出たことで、授業中にディスカッショントピックを変更したり、ハンドブックの説明部分でより上

級の内容を急遽加える対応が必要だった。②については、ディスカッションの際に机上の空論になってしまったり、「難しい問題である」と思考停止してしまったりすることが多く、自分自身が今日から始められる身近な行動についてなど、より発展したディスカッションに導くためのファシリテーションがワークショップを実施したメンバー個人の能力任せになってしまっていた。

そのため、今後の課題はより詳細なワークショップの内容をテンプレート化することで誰にでもワークショップが実施できるようにすること、ファシリテーションを学ぶ機会をつくることである。さらに登壇をした授業が文学部・文化構想学部設置のものに非常に偏っていたため、今後は他学部の授業にも登壇をすることでハンドブックの内容を周知していきたい。

4．多言語化の試み—英語版ハンドブックの作成報告

（執筆：Lilia Chesky，翻訳：春藤優）

私たちのチームが「性的同意ハンドブック」を翻訳する際に目指したのは、英語圏の読者に適した内容でありながら、日本語版と同じ内容、トーン、全体的なメッセージを反映させることである。そのために、翻訳を始める前に、用語や言葉の選択について十分な議論をする必要があった。英語では性暴力を表現する言葉が日本語よりも豊富にあるため、関連する各用語を定義し、ハンドブック全体のさまざまな文脈でどの用語を使用するかを一緒に決定することが必要だと考えた。さらに、日本語版にある事例の多くは、日本語や日本文化に特有の単語やフレーズを使用しているので、様々な背景を持つ英語圏の読者にとって意味があるようにするには、どのような表現がベストかを検討した。最初の翻訳が終わった後、先生や学生たちからフィードバックをもらい、翻訳の質を向上させ、必要な箇所の修正を行った。また、英語版は、いくつかの項目を追加した。例えば、ハンドブックには、人によっては読みにくいと感じるようなデリケートなトピックを扱っているので、性暴力に言及していることを示す事前の警告であるトリガーワーニングを付け足すべきと考え、追加した。ま

た、日本に住む外国人留学生は、文化や言葉の壁によって、より高いリスクにさらされる傾向があるため、日本で体験した性暴力のセクションを設けた。この新たな英語版ハンドブックによって、より多くの早稲田大学の学生・教職員が性的同意について学び、より安全なキャンパス環境を目指していくことを願っている。

5．結び—展望と課題

性的同意ハンドブックの完成は、それまでのそれぞれのサークルの活動にとって一つのゴールであった。しかし、性的同意ハンドブックは実際に活用され、読まれてこそ意味のあるものであるから、ゴールは同時に始まりである。ワークショップや多言語化の試みを通して、より多くの人に届けていきたい。また、ハンドブックによる「啓発」に終わるのではなく、暴力を許容するような大学の制度・文化を根本的に変えていくために、活動を広げてゆきたい。